

## 教科の探究的な学習による資質・能力の育成

### －ICT活用の特性・強みを家庭での端末活用に生かした授業実践－

総合支援部小中学校支援課小中第2班 勝又 規真

#### 1 主題設定の理由

急速な情報化の進展や技術革新により、社会は大きく、そして加速度を増して変化をしており、未来の予測が困難な時代となっている。

このような時代に生きる子どもには、日常生活や社会の中から問いを見いだし、自ら課題を設定し、その課題の解決に必要な情報を収集し、他者と対話しながら情報を整理・分析したことをまとめ・表現することで、課題を解決する力を身に付けてほしい。

「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」（以下、「答申」という。）においても「課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供すること」と示されており、未来を生きる子どもに自ら設定した課題を解決する力が求められていることが分かる。

研究協力校では、総合的な学習の時間において児童が自ら課題を設定し、情報を収集、整理・分析して、まとめ・表現する探究的な学習が行われているが、教科における実践は少ない。そのため、教科の資質・能力を育成する過程においても、探究的な学習を取り入れることで、「答申」（中間まとめ）に示されている「『自ら課題を見つけ、それを解決する力』を育成するため、他者と協働し、自ら考えぬく学び」の実現を目指したい。また、GIGA スクール構想により1人1台端末が整備されたことを生かし、授業はもとより家庭でも端末を利用し、ICT活用の特性・強みを生かして児童が探究的な学習に取り組むことができるようにしたい。

例えば、児童が課題を設定する場面では、家庭に学校の端末を持ち帰り、実社会や実生活との関わりの中で疑問に思ったり興味を持ったりした場面を記録し、身近な事象から問題を見いだし、課題を設定することで学習問題を自分事として捉えることができる。情報を収集する場面では、インターネットで検索するだけでなく、身近にあふれる事象や家族や地域の人へのインタビューも記録することで収集の幅が広がるだろう。自らが収集した情報をクラウド上に保存すれば、グループで情報を共有し、意見交換をしながら整理・分析をすることが可能になる。まとめ・表現の場面では、家庭でクラウド上に保存されたデータを開き、納得がいくまで発表資料を作成することもできる。また、作成途中の作品をクラウド上で共有すれば、他の児童の作品を参考にすることもできる。このように、クラウドを活用し時間的・空間的制約を超えて活動ができるというICT活用の特性・強みを生かしながら、実社会や実生活から課題を見付け、自ら設定した課題を解決する過程に取り組むことで探究的な学習の質を高め教科における資質・能力を育成したい。

そこで本研究では、教科における探究的な学習において、ICT活用の特性・強みを生かした授業や家庭での学習を行うことで、探究的な学習の質を高めることを目指す。

## 2 研究の目的

教科（国語科、体育科）における探究的な学習において、単元の指導計画を立て、ICT活用の特性・強みを生かした授業や家庭での学習を行うことで、探究的な学習の質を高めることができるかどうかを検証する。

## 3 研究の方法

- (1) 研究協力校の児童と教員に、事前の質問紙調査を実施して、実態を把握する。
- (2) ICT活用の特性・強みを授業や家庭での端末活用に生かした教科における探究的な学習の指導計画を立て、研究協力校において検証授業を実施する。
- (3) 授業実践ごとの授業記録や児童の振り返りの記述を分析・考察する。
- (4) 事前と事後の質問紙調査の結果を分析し、研究の成果と課題をまとめる。

## 4 研究の内容

### (1) 文献

#### ア 探究的な学習

「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総合的な学習の時間編」（以下、「解説 総合編」という。）では、探究的な学習の過程として「①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現」の一連の学習過程が示されている。本研究では授業実践Ⅰ、Ⅱの単元構想の中に①から④までの場面を設定する。児童が自ら課題や問題を設定し、その課題や問題を解決する活動を充実させることが、児童の主体的な学びにつながり、資質・能力を育成することが期待できる。各教科でも教科の特性に応じた学習過程が行われているが、本研究では「解説 総合編」に示されている探究的な学習の過程を取り上げることとする。

#### イ ICT活用の特性・強み

「教育の情報化に関する手引」（以下、「手引」という。）には、ICT活用の特性・強みが三つに整理されている（図1）。

① 多様で大量の情報を収集、整理・分析、まとめ、表現することなどができ、カスタマイズが容易であること
② 時間や空間を問わずに、音声・画像・データ等を蓄積・送受信でき、時間的・空間的制約を超えること
③ 距離に関わりなく相互に情報の発信・受信のやりとりができるという、双方向性を有すること

図1 ICT活用の特性・強み 「手引」を基に作成 ※傍線は引用者による

研究協力校では令和2年度までに、GIGAスクール構想により1人1台端末が整備され、児童が学習で端末を使う環境が整った。また、「ミライシード」「Microsoft365」のアカウントが児童と教員全員に付与され、クラウド上での情報の発信・受信が可能になった。そこで本研究では、「カスタマイズが容易」「時間的・空間的制約を超える」「クラウド上での情報共有」をICT活用の特性・強みと定義する。

#### ウ 家庭での端末活用

文部科学省Webサイト「StuDX Style」では、「ICT端末は家庭に持ち帰って活用することで時間的・空間的な制約を超えた学びや創造的な学びを広げることができる」

とある。本研究では、児童が学校の端末を家庭に持ち帰り、ICT 端末を探究的な学習に活用できるようにする。

## (2) 事前質問紙調査（6月）と分析

本研究では、授業だけでなく、授業以外の時間や家庭でも端末を活用するため、端末を使用することへの支援が必要な場面が多くなる。質問紙調査の結果から、学級担任が ICT を使うことに意欲的である 5 年生で実践を行う。

また、「手引」には、育成を目指す機器の基本的な操作等が、発達段階を意識して示されている。小学校中学年を意識したステップ 2 の段階では、キーボードによる文字入力や映像編集アプリの操作ができることなどが示されている。本研究での実践では、情報を整理したり、解決した課題をまとめて表現したりする場面で、文字を入力したり写真を撮影して取り込んだりすることが必要となってくる。そのため、キーボードによる文字入力や映像編集アプリの操作をし始めるであろう中学年の 3 年生でも実践を行う。

### ア 探究的な学習

教員を対象に「どの教科等で探究的な学習を行っているか」（複数回答）という質問をした。その際、「解説 総合編」で探究的な学習における児童の学習の姿として示されている①から④までの学習過程について教員一人一人に説明し、探究的な学習についての共通理解を図った。質問の結果から、研究協力校の各教科等での探究的な学習の実施状況が分かった。

総合的な学習の時間では教員の 100% が探究的な学習を行っている。一方、各教科では、算数、音楽、図画工作、体育、家庭、外国語（外国語活動）で探究的な学習を実施した教員の割合は 0% であった。探究的な学習が行われている教科も、担当教員が 1 人のみの理科は 100% だが、国語が 14.3%、社会が 40.0% とその割合は少ない。

### イ ICT 活用の特性・強み

教員を対象にした「授業でどのようなことに ICT を使っているか」（自由記述）という質問では、図 2 のような回答を得ることができた。

- |                              |
|------------------------------|
| ①調べ学習で活用（4人）                 |
| ②資料の提示、動画の視聴（3人）             |
| ③ムーブノートで意見共有（3人）             |
| ④タブレットの使い方（2人）               |
| ⑤まとめを作成した（2人）                |
| ⑥休校を想定して Teams の使い方を説明した（1人） |
| ⑦ペイントで字を書いたり絵を描いたりした（1人）     |

図 2 授業での ICT 活用方法 [N=12]

⑤から ICT 活用の特性・強みである「カスタマイズが容易」であることを生かした教員が 2 人（16.7%）いることが分かった。⑥から「時間的・空間的な制約を超える」を生かすことを想定して指導した教員が 1 人（8.3%）いるが、実際の活用には至っていない。③から「クラウド上での情報共有」では「ムーブノートでの意見共有」において 3 人（25.0%）の教員が ICT の特性・強みを生かしていることが分かった。

### ウ 家庭での端末活用

学校の端末の家庭への持ち帰りに関しては、教員を対象にした「学級の児童は、1 週間に何回くらい『学校の端末』を家庭に持ち帰っているか」という質問から、研究協力校の児童は学校の端末を家庭に持ち帰って使用をしていないことが分かった。

また、児童を対象に「家庭でどのくらい端末を使っているか」という質問では、家庭において、5年生では25人(100%)、3年生は21人(95.5%)の児童が、家庭の端末を使っていることが分かった。「家庭で端末をどのように使っているか」という質問では、5年生は11人(44.0%)が学習のために使っていたが、3年生で使っていたのは4人(19.0%)だけであった。5年生に「家庭で学習のためにどのように端末を活用しているか」(複数回答)という質問をすると、使用方法で多かったのは「情報の検索」9人(81.8%)や「ドリル学習」2人(18.2%)だった。

### (3) 研究構想

#### ア 授業実践 I

授業実践 I では、5年生で体育科「G 保健(2) けがの防止」の単元で、図3のように単元計画を作成した。この単元では、探究的な学習やICT活用の特性・強みを意識し、けがの防止について理解し、危険の予測や回避など、安全な生活を実践する力を身に付けることをねらいとした。

時	体育科(保健領域)「けがの防止」の学習内容	探究的な学習の過程	ICT活用の特性・強み		
			①	②	③
家庭	家庭で動画を視聴し、けがの原因を考えてデジタル付箋に記入し、クラウドに保存する。			○	
1	けがの原因が書かれたデジタル付箋を人の行動と周りの環境に分ける活動を行い、けがは人の行動や環境が関わって発生することを理解する。				○
休み時間	学校でけがや事故が起こりそうな危険な場所を探し、けがに関わる情報を収集する。	課題の設定 情報の収集		○	○
2	けがを防止するためには、安全な行動をすることが必要であることを理解し、学校でのけがについて危険の予測や回避の方法を考えたり選んだりする。	整理・分析 まとめ・表現		○	
家庭	家庭や地域でけがや事故が起こりそうな場所を探し、けがに関わる情報を収集する。	課題の設定 情報の収集		○	
3	けがを防止するためには、安全な行動に加え、環境整備が必要であることを理解し、地域でのけがについて危険の予測や回避の方法を考えたり選んだりする。	整理・分析 まとめ・表現			○
家庭	自分の「けが防止作戦」を考えるために情報を家庭で収集する。	課題の設定 情報の収集		○	
休み時間	学級担任や「Microsoft PowerPoint」を使える児童に操作方法を教わり、プレゼンテーションの作成の仕方を理解する。		○		
4	家庭で起こりそうなけがの原因を人の行動や周りの環境に整理・分析し、個人で「けが防止作戦」をプレゼンテーションにまとめる。	整理・分析 まとめ・表現	○	○	
家庭	プレゼンテーションを完成させる。	まとめ・表現	○	○	○
5	自分の考えた「けが防止作戦」を学級で発表する。	まとめ・表現	○		
6	けがなどの簡単な手当について理解し、簡単な手当をする。				
休み時間	大画面に児童が「けが防止作戦」についてまとめたプレゼンテーションを映し、全校児童に伝える。	まとめ・表現	○		

ICT活用の特性・強みは、①「カスタマイズが容易」②「時間的・空間的制約を超える」③「クラウド上での情報共有」とする。

図3 体育科(保健領域)「けがの防止」の単元計画

「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 体育編」では、「課題を見つけ、その解決に向けた学習過程」を通して資質・能力を育成することを重視することが示されている。「けがの防止」の単元は、日常生活の中からけがに関わる情報を得て課題を設定し、健康や安全に関する原則や概念に着目して捉え、けがを防止するという課題

の解決を目指す内容であり、探究的な学習との親和性が高い。よって本単元で授業実践を行うこととした。

### **(7) 探究的な学習**

授業実践Ⅰでは、学校、地域、家庭それぞれの場所での「けがの防止」について考えることを設定しており、探究的な学習の一連の過程を3回行う。校内での事故報告から日常生活の中でけがをする児童が増えてきていることを知った児童が、自分の生活を振り返り単元を通してけがの防止について考える。この活動を「けが防止作戦」と設定する。学校、地域、家庭それぞれの場面からけがに関わる情報を収集し、整理・分析をしながら「けが防止作戦」をまとめていく。単元の最後には「けが防止作戦」についてまとめたプレゼンテーションを全校児童に伝える。このような探究的な学習の一連の過程を行う中で、体育科の資質・能力の育成を目指す。

### **(イ) ICT 活用の特性・強み**

授業実践Ⅰでは、「けが防止作戦」の中で ICT 活用の特性・強みを生かす。けがに関わる情報を収集する場面では、「時間的・空間的制約を超える」ことを生かし、家庭や授業以外の時間にも活動できるようにする。収集した情報を整理・分析する場面やグループで考えをまとめる場面では、「クラウド上での情報共有」ができることを生かし、他の児童の意見を参考にすることもできるようにする。「けが防止作戦」をまとめる場面では、「カスタマイズが容易」であることを生かし、プレゼンテーションを作成することを計画する。なお、5年生では小学校卒業後の活用も考慮し、汎用性の高い「Microsoft365」のアプリを活用する。

### **(ウ) 家庭での端末活用**

授業実践Ⅰでは、家庭に学校の端末を持ち帰り、家庭や地域での「けが防止作戦」の学習を進めることができるようにする。家庭や地域で、けがに関わる情報の収集を行ったり、まとめの場面で、家庭に学校の端末を持ち帰り、プレゼンテーションの作成の続きを家庭で行うことを可能にしたりすることで、家庭で効果的に端末を活用できるようにする。

## **イ 授業実践Ⅱ**

授業実践Ⅱでは、3年生を対象に国語科で授業実践を行うこととし、図4のように単元計画を作成した。事前質問紙調査の「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から学習に取り組んでいるか」という質問に対し肯定的に回答した児童の割合が国語科は72.8%であり、他の教科の平均に比べ15ポイント以上低いことが分かった。そこで国語科においても探究的な学習を行い、自らの課題の解決に向けて学習に取り組んでいることを実感してもらいたい。授業実践Ⅱでは、「B 書くこと」領域を取り上げ、詩をつくる活動を行う。単元を通して、物の特徴を捉えたり、物の気持ちを想像したりして、伝えたいことが明確になるように表現を工夫して詩を書くことをねらいとする。

時間	国語科（書くこと）「〇〇になりきって詩をつくろう」の学習内容	探究的な学習の過程	ICT活用の特性・強み		
			①	②	③
1	教師が提示した詩の題材を考え、何かになりきって詩をつくるという学習課題をつかむ。				○
2	詩の題材にしたい物を探して写真を撮影し、写真や実物を見て題材の特徴を端末に書き込む。	課題の設定情報の収集	○		
家庭	家庭で詩の題材にしたい物を探し、その特徴を考えて端末に書き込み、記録する。	課題の設定情報の収集		○	
3	詩の題材の特徴をグループで共有し、その特徴を整理し題材のことを伝えられるのかを分析する。	整理・分析			○
家庭	第3時でのアドバイスを受けて、題材のことを伝えるために必要な情報を追加する。	情報の収集		○	
4	第3時で整理・分析した詩の題材の特徴をもとに詩を書く。	まとめ・表現	○		
5	詩に対する感想や意見をグループで伝え合い、題材のことを伝えるための内容を明確にする。	整理・分析			○
家庭	家庭で保護者につくった詩を読んでもらい、アドバイスをもらう。	整理・分析		○	
6	つくった詩を推敲し、清書する。	まとめ・表現	○		
7	完成した詩を読み合い、よいと思ったところを伝え合う。	まとめ・表現			○
家庭	端末を活用して、詩の展覧会をオンライン上で開き、完成した詩を保護者に披露する。	まとめ・表現		○	

ICT活用の特性・強みは、①「カスタマイズが容易」②「時間的・空間的制約を超える」③「クラウド上での情報共有」とする。

#### 図4 国語科（「B 書くこと」領域）「〇〇になりきって詩をつくろう」の単元計画

##### (7) 探究的な学習

授業実践Ⅱでは、詩をつくる活動に探究的な学習を取り入れ実践する。児童は身の回りの物から詩の題材を設定し、設定した題材を撮影する。撮影した写真から題材の特徴を考え、自分の考えた特徴が読み手に伝わるか判断するために、グループ内の児童と話し合いながら自分の考えた表現を整理・分析する。推敲を重ねて詩を完成させた後、写真と詩を組み合わせせて作品をつくる。単元の終わりには、クラウド上で詩の展覧会を開き、学級の児童だけでなく保護者にも詩を見てもらえるようにする。このような探究的な学習の一連の過程を行う中で、国語科の資質・能力の育成を目指す。

##### (イ) ICT活用の特性・強み

授業実践Ⅱでは、「〇〇になりきって詩をつくろう」という課題のもと、ICT活用の特性・強みを生かす。詩の題材を設定する場面では、「時間的・空間的制約を超える」ことを生かし、校内や家庭で撮影した写真を授業で活用する。写真と詩を組み合わせた作品をつくる場面では「カスタマイズが容易」であることを生かし、デジタル付箋に文章を入力したり写真を取り込んだりし作品をつくる。情報を整理・分析する場面では、「クラウド上での情報共有」ができることを生かし、自分の考えた詩の題材の特徴を他の児童と共有し、伝えたい題材が明確に伝わるかを分析する。

3年生には、キーボードでの文字入力技能がまだ十分に身に付いていない児童がいることも考えられるため、手書き機能を活用して文字を入力する方法も児童が選べるようにする。また、写真の撮影や取り込み、データの保存や共有がしやすいように、学習支援ソフト「ミライシード」を活用する。

#### (ウ) 家庭での端末活用

授業実践Ⅱでは、家庭で学校の端末を活用し、学校生活だけでなく家庭生活の中からも詩の題材を設定できるようにする。学校や家庭の中から詩の題材を収集することで児童が実生活の中から課題を設定できるようにする。詩を考えたり詩と写真を組み合わせたりする場面においても、家庭に学校の端末を持ち帰ることを可能にし、児童が納得がいくまで学習に取り組むことができるようにする。

また、学校の端末を持ち帰り家庭の端末からクラウドにアクセスしつづけた詩を保護者に見せ、アドバイスをもらうことで詩の推敲に役立てる。

#### (4) 授業実践

##### ア 授業実践Ⅰ

##### 課題の設定・情報の収集

課題を設定する場面では、学校、地域、家庭での生活を振り返り、けがをしたことがある場所やけがが起こりそうな危険な場所をできるだけたくさん探し、学校の端末で危険な場所を撮影した（図5）。撮影した写真の中から、最もけがをする人が多いと思う場所を「けが防止作戦」の課題に設定した。けがの多い場所を知るために、教員にインタビューをする児童もいた（図6）。



図5 家庭で学校の端末を活用し、危険な場所を探す場面



図6 インタビューで情報を収集している場面

##### 整理・分析

児童は情報の収集の場面で自分が撮影した写真からけがが起こる原因を予想した。整理・分析する場面では、予想した原因を「人の行動」と「周りの環境」に分けながら分類し、自分の考えを「Microsoft Excel」に入力した。クラウド上に保存された他の児童の考えを見ることで、自分の意見を追加したり新たな考えに気付いたりした（図7）。

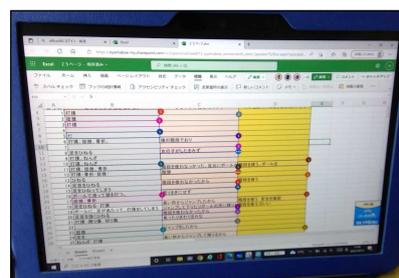


図7 情報共有し整理・分析する様子

##### まとめ・表現

第4時終了後、プレゼンテーションをより相手に伝わるように工夫したいと思った児童は、端末を家庭に持ち帰り「けが防止作戦」をプレゼンテーションにまとめる活動の続きを行った。児童は家庭で学校の端末を活用し、納得がいくまでプレゼンテーションの作成をすることができた（図8）。他の児童のプレゼンテーションを参考にすることができるよう、クラウド上で途中経過を共有した。

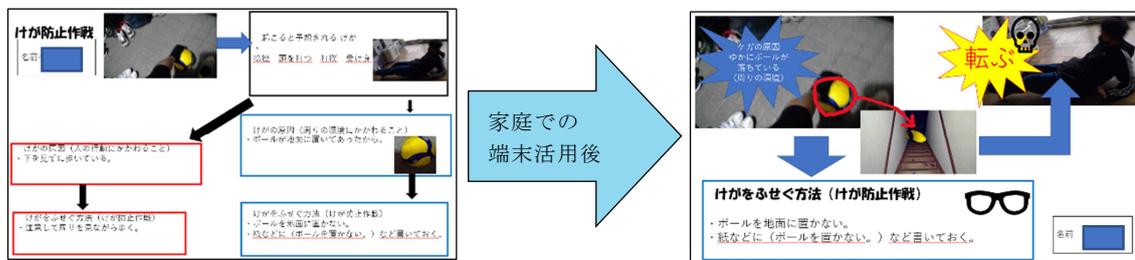


図8 家庭で学校の端末を活用し、作成の続きを行った児童のプレゼンテーション

## イ 授業実践Ⅱ

### 課題の設定

課題を設定する場面では、詩の題材を学校や家庭で探した。端末を活用し、学校だけでなく家庭でも課題を見付けることを可能としたことで、他の児童やオンライン展覧会を開き保護者に読んでもらうということを意識して児童は自分が表現したい物を題材として設定した。

### 情報の収集

児童は、設定した題材の特徴を考えるために、詩の題材を端末を使って撮影し、「ミライシード」のデジタル付箋に貼り付けた(図9)。図鑑やインターネットから情報を収集して、データを貼り付けた児童もいた。その後、写真を貼り付けたデジタル付箋に、自分の経験や想像から詩の題材の特徴を表す言葉を追加した(図10)。



図9 端末で詩の題材を撮影している場面



図10 詩の題材の特徴を書き込んだデジタル付箋

### 整理・分析

詩の題材の特徴が読み手に明確に伝わるかを判断するために、デジタル付箋に書き込まれた題材の特徴を表す言葉を整理・分析した。各自が題材の特徴を表す言葉を色、形、大きさの視点を中心に比較・分類し、考えた言葉の表現が読み手に明確に伝わるかグループ内で検討をした。題材の特徴が記録されたデジタル付箋をクラウド上で共有し、新たに考えた表現などを各自が即時にデジタル付箋に付け加えるなど共同編集をした(図11)。



図11 クラウド上で共同編集をしている場面

### まとめ・表現

詩を書く場面では、児童がキーボードを使った入力か手書き機能を使った入力か選

択して、詩をデジタル付箋に書き込んだ（図 12）。



図 12 3年生が文字を入力する様子

また、端末を使って撮影した写真と自分が作成した詩を端末を使って組み合わせ、作品をつくった（図 13）。単元の最後には、クラウド上に完成した作品を保存し、保護者が閲覧できるようにし、オンライン展覧会を開いた。学級だよりに二次元コードを載せ、保護者がオンライン展覧会にアクセスできるようにした（図 14）。



図 13 写真と詩を組み合わせた作品



図 14 展覧会のお知らせをした学級だより

(5) 分析と考察

ア 授業実践 I

体育科「けがの防止」の単元では、評価規準について、図 15 のように設定した。

評価	評価の観点	評価の視点
「おおむね満足できる」状況 (B)	知識・技能	けがの原因には、人の行動や環境が関わっていることを理解することができる。
「おおむね満足できる」状況 (B)	思考・判断・表現	自分のけがに関わる経験を振り返ったり、学習したことを活用したりして、危険の予測を考えることができる。
「おおむね満足できる」状況 (B)	主体的に学習に取り組む態度	「けが防止作戦」についての自分の考えをまとめる学習に取り組もうとしている。

図 15 単元の評価規準

A評価とB評価を合わせた割合は、すべての観点において90%を超えていたことから、単元で育成したい資質・能力はおおむね育成することができたと考えられる。

(7) 探究的な学習

単元終了後に、授業実践 I で行った探究的な学習の場面の到達度について児童に質問した結果を図 16 に示す。

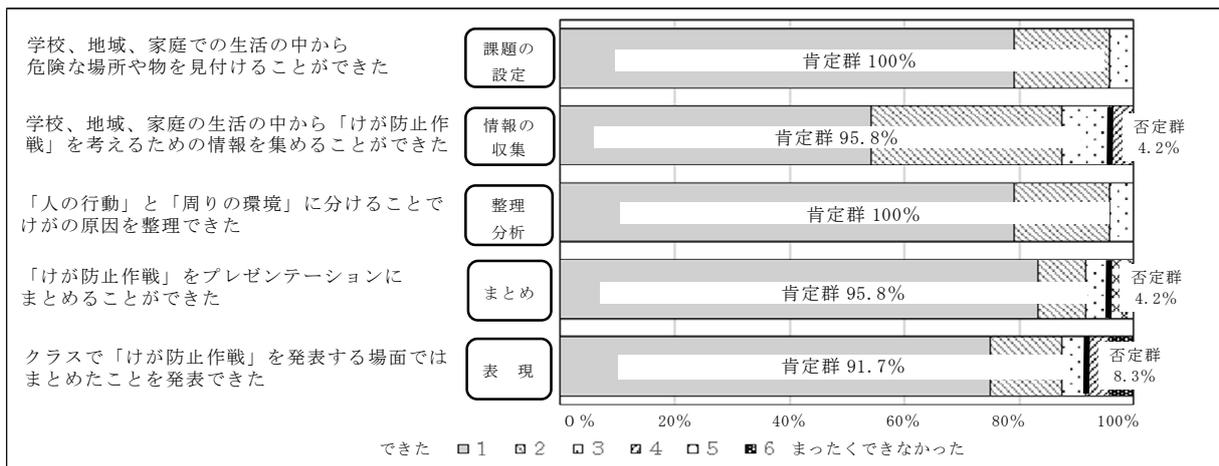


図 16 体育科「けがの防止」の単元における探究的な学習の活動の到達度 [N=24]

図 16 から探究的な学習のすべての場面で 90%以上の児童が肯定的な回答をしたことが分かる。図 17 は探究的な学習についての振り返りの記述である。

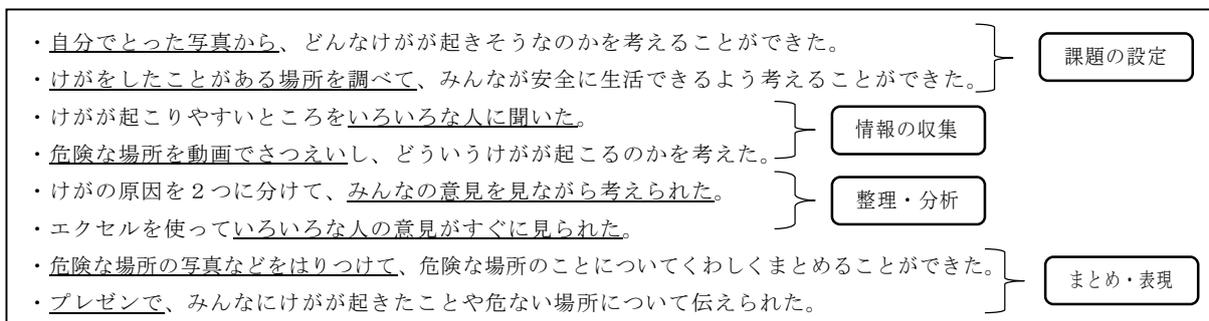


図 17 探究的な学習についての振り返りの記述

図 17 の記述内容から、写真撮影、インタビューなど情報を収集する方法を自ら選択したり、他の児童と意見を共有し自分の考えを整理・分析したりするなど、探究的な学習の過程を通し「けが防止作戦」を完成させたと考えられる。

(4) ICT 活用の特性・強み

単元終了後に「端末を使うことは保健で行った『けが防止作戦を考えよう』の学習に役に立ったか」という質問に対して 22 人 (91.7%) が肯定的に答えた (図 18)。

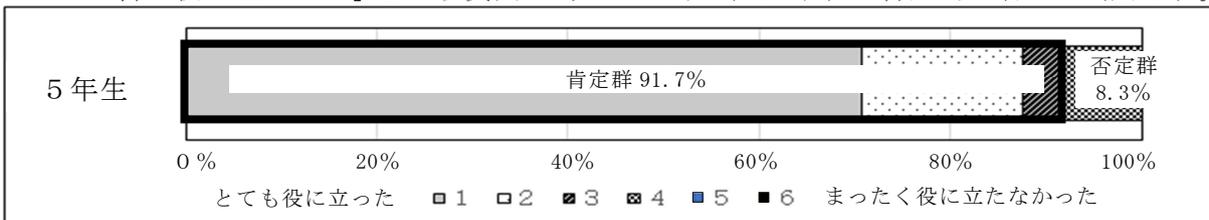


図 18 端末を使うことは学習の役に立ったか [N=24]

図 19 は「保健『けが防止作戦を考えよう』の学習で端末はどんなことに役に立ったか」という質問での児童の記述である。

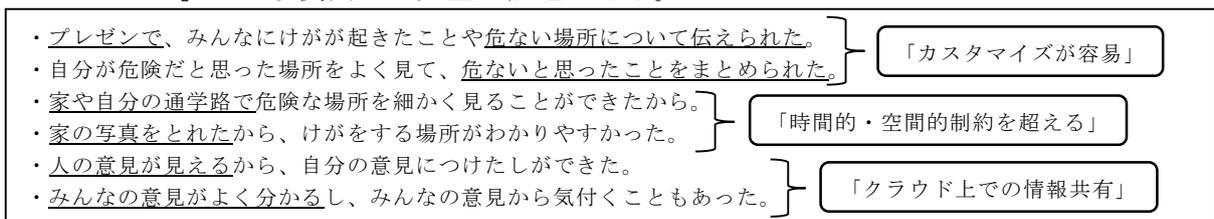


図 19 保健の学習で、端末が役に立った場面についての記述

これらの結果より、児童は端末の使用が学習に役立ったと感じたと同時に、ICT活用の特性・強みを生かして探究的な学習をしていたことが考えられる。

#### (ウ) 家庭での端末活用

図 20 は「家庭でどのように端末を使っているか」という質問に対し、学習のために使っていると回答した児童の割合である。6月と比較すると12月は47.3ポイント上昇した。

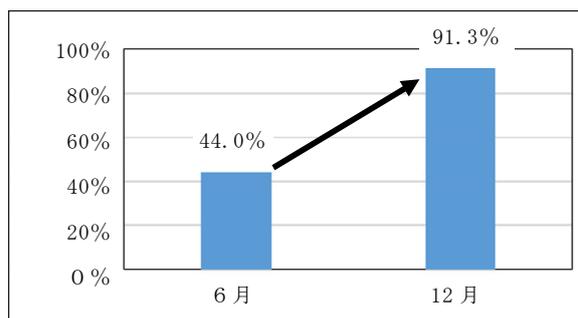


図 20 家庭で学習に端末を活用している児童の割合 [6月 N=25 12月 N=23]

12月に実施した質問紙調査から、学習のための端末の活用方法（複数回

答）で最も多かったものは、学校の授業のための使用19人（90.5%）であった。児童は、課題を見付けるために写真を撮影したり、まとめのためのプレゼンテーションを作成したりしたことが考えられる。家庭で学校の授業のために端末を使用した19人のすべてが、家庭や地域において「けが防止作戦」のために情報を収集したり、プレゼンテーションにまとめたりすることができたことから、90%を超える児童が、家庭での端末活用を課題の解決に活用できたと考えられる。

#### イ 授業実践Ⅱ

国語科「〇〇になりきって詩をつくろう」の単元では、評価規準について図 21 のように設定した。

評価	評価の観点	評価の視点
「おおむね満足できる」状況（B）	知識・技能	言葉には考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付くことができる。
「おおむね満足できる」状況（B）	思考・判断・表現	身の回りの物から詩の題材を選び、伝えたいことを明確にすることができる。
「おおむね満足できる」状況（B）	主体的に学習に取り組む態度	進んで伝えたいことを明確にし、学習の見通しをもって詩をつくろうとしている。

図 21 単元の評価規準

A評価とB評価を合わせた割合は、すべての観点において90%を超えていたことから、単元で育成したい資質・能力はおおむね育成することができたと考えられる。

#### (7) 探究的な学習

単元終了後に、授業実践Ⅰと同様の調査を行い、授業実践Ⅱで行った探究的な学習の場面の到達度について質問した。授業実践Ⅰと同様に探究的な学習のすべての場面で90%以上の児童が肯定的な回答をした。

図 22 は探究的な学習についての振り返りの記述である。

・ <u>なりたい物</u> を書いてよかった。	課題の設定
・ <u>たくさん</u> しょうほうを集められることが楽しい。	情報の収集
・ とくちょうが分かりやすくても詩が楽しくないし、分からなさすぎても詩が楽しくないから、 <u>友達</u> の意見でしゅう正できた。	整理・分析
・ <u>見て分かる</u> とくちょうや物の気持ちをうまく使って詩をつくれたと思う。	まとめ・表現

図 22 探究的な活動についての振り返りの記述

図 22 から、児童は実生活の中から詩を書いて伝えたいと思った題材を選び、他の

児童からのアドバイスを参考にしながら、自分が考えた詩を書くときに使う題材の特徴を整理・分析し、詩を完成させていったことが分かる。このことから、単元の中で探究的な学習が行われ、児童は自ら設定した課題を解決しようとしていたと考えられる。なお、児童が詩を発表する場面ではオンライン展覧会を行い、多くの保護者から好意的な意見をもらった。

#### (イ) ICT 活用の特性・強み

単元終了後に、単元の中で端末を操作する5つの場面について、端末の活用をすることができたかを児童に質問した(表1)。

表1 端末を操作する場面で、端末を活用することができたか[N=19]

	文字を入力する	デジタル付箋を書く	写真を撮る	写真をデジタル付箋に取り込む	文字と写真を組み合わせる
できた	94.7% (18人)	100% (19人)	100% (19人)	100% (19人)	100% (19人)
できなかった	5.3% (1人)	0% (0人)	0% (0人)	0% (0人)	0% (0人)

表1より、端末を操作する5つの場面において、90%以上の児童が端末を操作できたことが分かる。図23は児童が作品を提出したときの共有画面である。20人全員が写真と詩を組み合わせ作品を提出できたことが分かる。20人中5人の児童は手書き機能を使った入力を選択しており、児童が自分の技能などに応じて端末を操作していることが分かる。このことから児童に文字の入力方法を選択させたり学習支援ソフトを活用したりするなどの支援を行うことで、3年生もICT活用の特性・強みを生かし学習を行うことができたと考えられる。

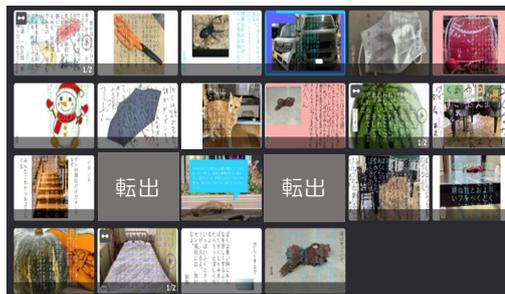


図23 児童の作品の提出状況

#### (ウ) 家庭での端末活用

図24は単元終了後に、「自分がやりたい物の特徴をどこで集めたか」という質問への児童の回答をまとめたものである。図24より13人(68.4%)の児童が家庭で情報を収集しようとしていたことが分かる。

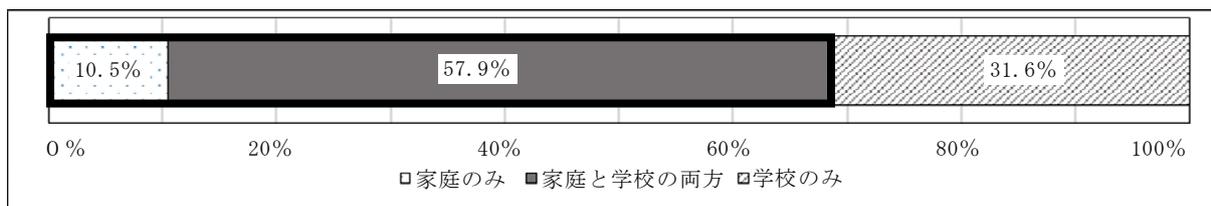


図24 自分がやりたい物の特徴をどこで集めたか[N=19]

また、提出された作品から、図25のように家庭でも学校の端末を活用し、表現を工夫した作品をつくったり、図26のように新たな詩をつくった児童がいたりしたことが分かった。児童は家庭で端末を活用して、さらに作品をよくしようと制作をしたり、「(学校で完成しなかったので)家でやれて助かった」という児童の振り返りへの記述から納得がいくまで学習に取り組んだりしたと考えられる。

